

令和二年（二〇二〇）三月二十六日発行
『大倉山論集』第六十六輯抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

（第四十回研究所資料展）

日本精神文化曼荼羅の魅力―宗教画家井村方外の世界―

星 原 大 輔

(第四十回研究所資料展)

日本精神文化曼荼羅の魅力―宗教画家 井村方外の世界―

星 原 大 輔

大倉精神文化研究所附属図書館の閲覧室には、縦横約二・五メートルもある絵画「日本精神文化曼荼羅」が掲げられている。本研究所の創立者・大倉邦彦が研究所設立の精神や活動目的を、宗教画家の井村方外いむらほうがいに図示させたもので、研究所本館（現 横浜市大倉山記念館）の建設と並行して制作された。研究所本館が横浜市に寄贈されるまで、この曼荼羅は応接室（現 第五集会室）の壁面に掲げられ、大倉が来館した客人にこれを見せながら、研究所のことを説明したと伝えられている。研究所の精神や歴史を伝える重要な資料ではあるが、作成から約九〇年の月日を経て破損や痛みが所々に見られるようになった。そのため平成二六年（二〇一四）に専門家による一部修復を行い、そして令和元年（二〇一九）七月にその保存環境を整えるべく新たに展示ケースを設置することとなった。

そこで、当財団に残されている関連資料や井村方外の絵画を基に、「日本精神文化曼荼羅」に込められた大倉邦彦の想い、そして作者である井村方外いむらほうがいの人物像の一端を紹介する研究所資料展「日本精神文化曼荼羅の魅力―宗教画家

井村方外の世界」を企画・開催した。期間は令和元年七月三十一日（水）から一〇月一九日（土）まで、会場日数は五七日、期間中の入場者数は延べ九三二人であった。企画にあたっては、井村家から貴重な話を伺い、西光寺では方外の作品を観覧、撮影することができた。ここに記して謝意を表したい。なお今回の展示ケース新設に併せて、曼荼羅の内容を紹介する映像「大倉邦彦と鑑賞する日本精神文化曼荼羅」及びリーフレット「日本精神文化曼荼羅」を作成し、七月三十一日に記念イベント「邦彦・方外と日本精神文化曼荼羅」を開催したことも付記しておく。

本稿では展示資料とキャプションをパネル順に掲げたが、キャプションの一部に適宜加筆修正を施している。

ごあいさつ

大倉精神文化研究所附属図書館の閲覧室には、縦横がそれぞれ約二・五メートルもある巨大な絵画「日本精神文化曼荼羅」が掲げられています。これは、創立者の大倉邦彦が画家の井村方外に図示させたもので、昭和七年（一九三二）に竣工した研究所本館（現横浜市大倉山記念館）の建設と並行して制作されました。開館当初は、

応接室（現第五集会室）の壁面に掲げられており、来館したお客様に、研究所設立の精神や活動目的を説明す

る際に使われたといわれています。

それから八十七年。絵画の劣化が懸念されたため、附属図書館を一時閉館して、絵画の保存環境を整えるべく、新たに展示ケースを設置しました。そこで今回、日本精神文化曼荼羅の魅力を皆さまに紹介する展示を企画いたしました。

大倉邦彦が考えていたこと、この大倉山の地で実践しようとしたことは何だったのでしょうか？日本精神文化曼荼羅に描かれている人物は誰なののでしょうか？

これらの秘密を紐解きながら、日本精神文化曼荼羅の魅力を紹介します。

一 大倉精神文化研究所の理念

① 創立者・大倉邦彦

大倉精神文化研究所の創立者・大倉邦彦（明治一五年（一八八二）～昭和四六年（一九七二））は、佐賀県神埼市姉川地区の江原家に、次男として生まれました。明治三九年（一九〇六）に上海の東亜同文書院を卒業したのち、大倉洋紙店に入社します。明治四五年（一九一二）二代目社長の大倉文二に働きぶりが認められて養子となり、のちに三代目社長となりました。

大倉は、世のために専念すれば、自ずと「利益の副産物」が得られ、そして「国家社会を繁栄させる肥料」としなければならぬ、と考えていました。そこで企業経営で得た利益を基に、教育事業として、富士見幼稚園（東京都目黒区）や農村工芸学院（佐賀県神埼市）などを開設します。そして自身の考えを世の中により広く普及するべく、当研究所を創立するに至りました。

《展示資料》

・写真「東洋大学学長就任時の大倉邦彦」

昭和十二年（一九三七）

沿革史資料 No.2282

・大倉邦彦書「躬行」

沿革史資料 No.2294

「実践躬行」は大倉邦彦の座右の銘の一つです。学園を通じて「正しい信念」を得るだけではなく、その信念に基づいて自ら行動しなければならぬと、常に語っていました。

・写真「富士見幼稚園の園舎」

沿革史資料 No.2295

昭和一九年（一九四四）の閉園まで、毎年一〇〇名程の卒園生を送り出しました。

・写真「農村工芸学院の卒業写真」

昭和四年（一九二九）七月

沿革史資料 No.2291

女性の精神的かつ経済的自立を目的に、一年間のカリキュラムが組まれていました。

② 研究所の創立経緯

大倉邦彦は、関東大震災の余韻もさめやらぬ大正一四

年（一九二五）春、「国民の良心の扉」を開きたいとの使命感に燃え、研究所の創立を思い立ちました。その本館として建設されたのが、現在の横浜市大倉山記念館です。

大倉はまず、私財を投じて精神文化図書館を設立しようと考え、大正一五年（一九二六）三月、欧米諸国を指して旅立ちます。目的は、宗教教育の実状と研究所・図書館の運営を視察し、そして精神文化に関する洋書を購入することでした。現在、「洋書コレクション」（約九〇〇〇冊）として、附属図書館に所蔵されています。

また大倉は、東京帝国大学史料編纂所の協力を得て、全国の旧家・寺社が所蔵する貴重な史料群の中から、精神文化に関する良書を選び、副本を作成しました。これらは現在、「古文書古記録影写副本」として附属図書館に所蔵されています。なかには、原本がのちに戦災などで失われてしまったものもあります。

その後、大倉の構想は研究所の設立へと進展しました。設立趣意書では、人びとの心の中に「宗教的信念に立脚せる正しき人生観」を確立させること、そして「人類文

化の普遍的意義」と日本の「精神文化の本質的価値」を精究して、「正しき信念に基づく国家観」を持つことが必要である、と記されています。前者の「心」と後者の「知性」を身に付けた人材を生み出し、社会に発信していくこと―これが研究所の使命とされました。

『展示資料』

・原田三千夫「精神文化図書館要誌」（日誌）

沿革史資料 No.225

昭和三年（一九二八）五月一四日付。大倉邦彦の秘書・原田三千夫は日誌の冒頭に、大倉の構想を「精神文化図書館要誌」と題して、次のように書き記しています。世界の文化が「混沌の相」を呈しつつある中、日本には「他国文化の模倣か修飾」ではなく、「東西の文化を融合して新しく日本文化を創造する」使命がある、そしてこの使命を担う人物を養成することが急務である。

・写真「ロンドン郊外にて」

沿革史資料 No.226

大倉と秘書の原田が並んで立っている姿が撮影されて

います。原田は洋書の購入を担当しました。購入した洋書のなかには、一五七八年に刊行されたステファヌス版『プラトン全集』（請求記号：1313.51-3）とつた、大変な貴重なものもあります。

・「大倉精神文化研究所設立趣意書」

昭和四年（一九二九）二月一日 沿革史資料No.11038

③ 研究所本館の設計

大倉精神文化研究所本館の設計を担当したのは、長野宇平治（慶応三年（一八六七）～昭和十二年（一九三七））です。大倉とは東京ロータリークラブで知り合い、親交を深めたようです。関東大震災で焼失した大倉洋紙本店の新社屋の設計も、長野が担当しました。

大倉山記念館には、ギリシャ以前に栄えたクレタ・ミケーネ文明に見られた建築様式が使用されています。長野はこの建築様式を「ブレ・ヘレニック様式」と名付けています。こうした建築様式を用いた建物は、ここ以外に例がなく、世界で唯一のものとなっています。

また、ロビーやエントランスホールに置かれている椅子なども、建物と同じ様式で製作された特注品です。

《展示資料》

・「SEISHIN・BYNKWA・NO・DENDO（精神文化の殿堂）」

沿革史資料No.11039

長野が設計に取り掛かり始めた頃に、自ら描いたスケッチです。完成した現在の建物とはかなり異なっています。大倉の理念に基づいて、この長野案にさまざまな修正が加えられていったのでしょう。

④ 研究所本館の意匠―形式は信念の具象

大倉は、昭和七年（一九三二）四月九日、開所式の挨拶で、「形式は信念の具象である」と述べています。彼の研究所創立の理念の一つが「東西文化の融合」です。本館として建設された現在の横浜市大倉山記念館の装飾に、その理念が見てとれます。

その一つが、大倉山記念館のホールの内装です。かつては殿堂（神殿）と言い、信仰心を表す場所でした。正

面の演壇や四隅の円柱はブレ・ヘレニック様式です。当初はパイプオルガンの設置も考えられており、西洋的なデザインが目につきます。しかし上を見上げると、天井は神社建築の形式が再現されており、また天井と円柱との間には、寺社建築のよく観られる斗^{とぎょう}拱が用いられています。このように、ホール全体で「東西文化の融合」の理念が表現されています。

もう一つが、正面入口のペディメント（破風）です。建物正面に位置する切妻屋根の三角形の部分には、その建物を象徴する彫刻などが施されます。洋風の外装をもつ記念館では、一枚の鏡の左右を、二羽の鳳凰が雲に乗り綬をくわえて守護している装飾となっています。この鏡は正倉院御物の八稜鏡を模したものです。ここにも理念が表れていると言えます。

《展示資料》

・「吉祥天デッサン」

沿革史資料No.251&251.3

製作者の水谷鐵也自筆の初期のデザインと推定されます。大倉は「神道、仏教の楽器又は儀式に用ゆる道具

等を入れる、簾、ヒチリキ、釣鐘、木魚等をハーモニズする表象」にしたいと考えていました。

・写真「ペディメントの原型」

昭和四年（一九二九）二月一日 沿革史資料No.110&2

⑤ もう一つの曼荼羅——形式は信念の具象——

今回紹介する「日本精神文化曼荼羅」の他に、大倉精神文化研究所には曼荼羅がもう一つありました。それは、本館正面の庭にあった「地理曼荼羅」です。「所内しるべ」（沿革史資料No.150&）には、次のように説明されています。

庭は日本並びに東洋の地図を象^{かたじ}つて居ります。敷地全体九〇〇坪の土地は世界を意味し、建物は個人を表して居ります。かくして日本と個人と世界とは三位一体である意味を表わすものであります。

大倉山全体を世界に、建物を人間に見立て、庭に日本列島の形を作ること、個人・日本・世界が一体であることを表現したのです。



【図1】 画像の一部を加工して、日本列島の形を分かりやすくしています。

《展示資料》

・写真「地理曼荼羅」【図1】

沿革史資料 No.2665

昭和一〇年頃、本館の塔屋から撮影した正面の庭です。地理曼荼羅は、日本列島の形に芝をはり、周りに砂利を敷き詰め、松の木を植えて作られました。この写真ではかたちがきれいに見えますが、現在は土に埋まってしまうて見ることはできません。

二 日本精神文化曼荼羅とは

① 曼荼羅（マンダラ）とは

曼荼羅とは、密教の經典に基づいて、諸尊の悟りの世界を一定の幾何学的パターンで描いた図像です。輪円具足と漢訳されているように、中心の主尊を諸仏・菩薩などが円形で取り囲むように描かれます。

日本に曼荼羅を伝来したのは、空海です。大同元年（八〇六）唐から帰国する際に、胎藏界と金剛界の両界曼荼羅を持ち帰りました。空海は曼荼羅の利用目的を、「密蔵深玄にして翰墨に載せ難し、更に図画を仮りて悟らざるに開示す【密教の教えは、深遠で玄妙な奥義であるので文章で伝えがたい。そこで図画を用いて、まだ悟りに達しない者の眼を開くのである】」（「御請来目録」）と説明しています。

二つの曼荼羅から成る「両界曼荼羅」には、大日如来の説く真理や悟りの境地が描かれています。

その一つである「胎藏界曼荼羅」は悟りの世界を表しており、子供が母親の胎内で育つように、大日如來の慈悲により、人間に内在する悟りが生れ育つとしています。全体は十二の区画(院)に分けられ、大日如來を中心に四体の如來と菩薩が囲み、さらにその外を一六九体の如來や菩薩などが取り囲んでいます。

もう一つの「金剛界曼荼羅」は智慧の世界を表しており、大日如來の智慧が、ダイヤモンドのように堅固で、揺らぐことがないことを表しています。大日如來を主尊とする九種の曼荼羅がおさめられています。

その後、日本では密教以外でも曼荼羅は作成され、利用されるようになりました。

例えば、浄土曼荼羅の一つである当麻曼荼羅です。

『観無量寿経』に基づいて、中央に阿弥陀仏如來が座し、周りを菩薩や天人たちが囲んで舞樂を演じている極楽浄土の様子を描いています。また、日本の神々は仏教の仏が「仮に姿を変えて現れたもの」であるとする思想(本地垂迹説)に基づいて、神社の縁起や靈驗を説明する

ために、宮曼荼羅が作成されました。

『展示資料』

・「胎藏界曼荼羅」(鎌倉時代) 奈良国立博物館所蔵

出典：ジャパンサーチ [Colbase (<https://jpsearch.go.jp/item/cobas15492>)]

・「金剛界曼荼羅」(鎌倉時代) 奈良国立博物館所蔵

出典：ジャパンサーチ [Colbase (<https://jpsearch.go.jp/item/cobas15493>)]

・「当麻曼荼羅」(鎌倉時代) 奈良国立博物館所蔵

出典：ジャパンサーチ [Colbase (<https://jpsearch.go.jp/item/cobas15299>)]

・「春日宮曼荼羅」(室町時代) 奈良国立博物館所蔵

出典：ジャパンサーチ [Colbase (<https://jpsearch.go.jp/item/cobas14902>)]

② 日本精神文化曼荼羅の作成経緯 1

絹本着色肖像画の「日本精神文化曼荼羅」は、大

倉精神文化研究所の創立者・大倉邦彦の創案に拠って、研究所本館(現横浜市大倉山記念館)の建設工事と並行して作成されました。研究所開設後は、研究所本館の応接室(現第五集会室)の東壁に掲げられました。

大倉は曼荼羅に描く人物の選定を、藤原猶雪を介して



【図2】

辻善之助^{つじぜんのすけ}に依頼します。その結果、「神儒仏三方面」から、聖徳太子をはじめとする「十哲」が提案されました。

《展示資料》

・写真「応接室（現第五集会室）」

昭和五七年（一九八二）頃

沿革史資料No.1616

・写真「第一一回大倉山中等修養会」【図2】

昭和十一年（一九三六）三月

沿革史資料No.626226

・写真「日本精神文化曼荼羅の前で話す大倉邦彦」

年月不明（戦後）

沿革史資料No.8673-100

・写真「辻善之助」

（「アサヒグラフ」一九五二年一月二日号）より

明治一〇年（一八七七）～昭和三〇年（一九五五）。東京帝国大学教授、東京帝国大学史料編纂所初代所長などを務めました。堅固な実証主義的研究で日本仏教史に大きな業績を残すとともに、史料の編纂事業に尽力しました。

・写真「藤原猶雪」

（「写真」卒業記念・東洋大学 一五年三月）沿革史資料No.823

明治二十四年（一八九二）～昭和三三年（一九五八）。史料編纂官補、東洋大学一五代学長などを務めました。真宗大谷派の僧侶でもあり、親鸞や真宗に関する研究に取り組みました。昭和十一年（一九三六）から三年間、大倉精神文化研究所の研究嘱託となっています。

・大倉邦彦宛藤原猶雪書翰、（昭和五カ）年六月一日付

大倉精神文化研究所所蔵

ここから、①選定作業は辻善之助を中心とするメンバーで行われ、②神道・儒教・仏教の三つの分野から代表的な人物一〇名が選出されたこと、がわかります。

〔翻刻文〕

拝啓 昨日は失礼仕り申上候。却説その節御話し有之候壁画の人物、本日辻博士を中心として評議の結果、別帙の如く神儒仏三方面より最も公正なる見地に基き十哲を撰定いたし申候。貴覧に供し候。御高見を差加への上御決定遊され度し。勿々敬具

六月十一日

藤原猶雪

大倉様御侍史

③ 日本精神文化曼荼羅の作成経緯2

大倉邦彦は昭和五年（一九三〇）四月頃、宗教画家・井村方外に描画を依頼します。方外は京都や奈良などの古寺を回って、各種の曼荼羅や「十哲」の肖像画を見学・模写し、作品の構想を練り上げました。

《展示資料》

・大倉邦彦宛井村方外書翰、昭和五年六月七日付

沿革史資料 No. 3628

大倉の創案を受けて方外が、「古曼荼羅様式」という構図を提案しています（下線部）。また「画像模写に出掛け」たいとあるように、方外がいくつもの肖像画や彫刻などを調べた上で描画に臨んでいたこともわかります。

〔翻刻文〕

拝啓 御尊堂益々御清祥奉敬賀候。先般は御多用中相伺ひ種々御厚情に接し有かたく御礼申上候。扨て其後小生用命の図面方研究仕り、作図に没頭罷在候。先月は旧都に遊び画想を練り申候。只画像としてのみならず、宗教的芸術としての力を種々の方面より發揮致し度、装飾等の点も苦心仕り、小生の頭脳の及ぶ限りを尽くして一創作を作りださんものと意気込致し、今日迄に想に浮び居り候構図者、中央に太子、上段を四天王、左右を高僧にて、之を古色裂を以てしきり、之に文字を入れ、古曼荼羅様式になす工風に御座候。之は

極彩色の力により光々しきものと致し度く、また太子宮を水墨の森々として神々しき趣を筆致の妙味により表現し、装飾を白木御殿の感じを出し度と、種々苦心罷在候。此両方面より此事業を完成せんものと企て居候。今日日本仏教芸術の力をいかほとまてに表現し得らる、や、凡骨を尽くして努力可仕候。尚乍早速御願ひ申上度候件者七名高僧のお名前を至急御一報被下、また大学史料へ画像模写に出掛け度候間其御手続き被下度。乍御手数御願ひ申上候。右二件甚御面倒に候へ共、宜敷御願申上候。大和当麻寺の中將姫蓮糸曼荼羅などは二間四方も有之、当時は有名なるものなりしなると存せられ候。銀閣寺側無庵氏工案の大神宮白木造りの感じも多少小生の参考と存居候。先は不取敢右御願ひ迄。早々

六月七日

方外拝

大倉大人御人々

・大倉邦彦宛井村方外葉書、昭和五年二月一八日付

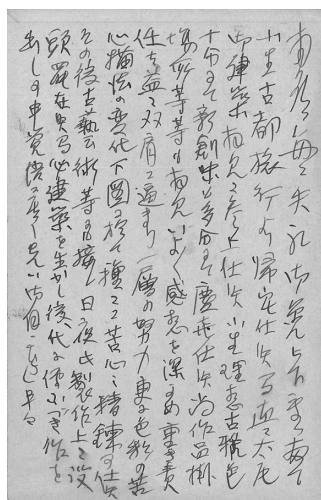
【図3】

沿革史料 No.9060

前記の書翰にも「小生の頭脳の及ぶ限りを尽くして一創作を作りださんものと意気」とあるように、方外は相当な熱意を注いで作成に取り組んでいました。

（翻刻文）

拝啓 毎々失礼御免被下度候。扱て小生古都旅行より帰宅仕候間、近々太尾御建築拝見に参上仕候。小生理想古雅色十分にて新創味も多分にて慶喜仕候。尚作品掛場所等等も拝見、いよく感想を深かめ、重き責任を益々双肩に逼まり、一層の努力、更に色彩の苦心、描法の変化、下図に於て種々に苦心之精錬可仕候。そ



【図3】

の後古芸術等にも接し、日夜此製造上に没頭罷在候間、必建築を生かし後代に伝ふべき作を出し可申覚悟に御座候。先は御伺其迄。早々

④ 日本精神文化曼荼羅にみる理念

大倉邦彦は、日本精神文化曼荼羅を通して、二つの事を表現しようとした。

第一に「日本人の思想・心」です。「所内しるべ」には、次のように記されています。

この曼荼羅は大小の円座えんざを日輪月輪かたじに象かんつて、惟神かななごらの道、即ち日本固有文化の基礎をさし示し、その上に神儒仏道を体現せる偉人を配して日本精神文化の弥栄いやさかをあらはし、加ふるに四天王の守護あるを憶念せしむるものであります。

第二に「人間は大宇宙の中で生かされていること」です〔研究所案内（大倉邦彦）「沿革史資料No.634」。

（真ん中の）この丸い大きなものがお天道様と、まあちよつとお考えください。真ん中がお月様です。天

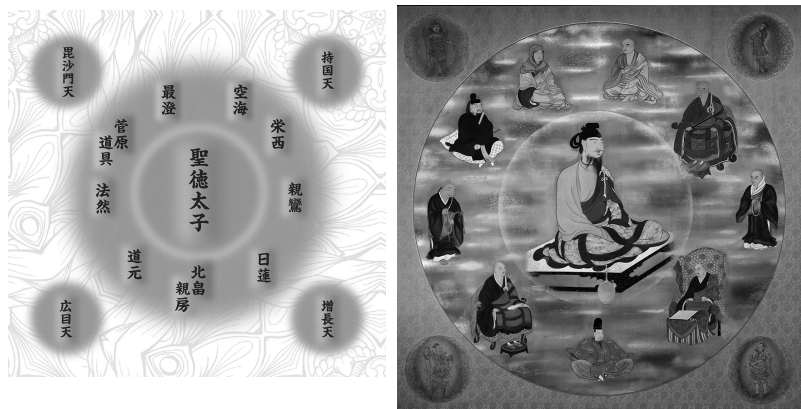
地宇宙の真理を言うのです。それを描いた、それを示したものです。その上に出来た人間がおります。つまりこれは大宇宙の真理そのものが支配する、結局これは生かされている人間であつて、生きてる人間じゃないので、生かされているのです。

《展示資料》

・写真「日本精神文化曼荼羅」〔図4〕

沿革史資料No.11023

曼荼羅の四隅には四天王（北方の毘沙門天〔多聞天〕、東方の持国天、南方の増長天、西方の広目天）が描かれています。四天王とは仏教の守護神で、世界の中心にあるという須弥山しゅみせんの中腹で、仏法あるいは信仰者を外敵から守る役目を果たすとされています。しかし「人間は心の中に敵が生れる」という大倉の考えから、この曼荼羅では、甲冑を身にまとい武器を持つ四天王は、内側を向いた姿で描かれているのが特徴です。また、四天王はそれぞれ守護する方角が決まっています。方外は、この曼荼羅が応接室の東壁に掲げられることを踏まえて、四天王の配置を決めたと推測されま



【図4】 左の人名入りの配置図は、当研究所が作成した。

す。しかし今は、附属図書館の閲覧室の西壁に掲げられているため、配置と方角は一致していません。

⑤ 日本精神文化曼荼羅の「十哲」

(1) 日本仏教の創設者・聖徳太子

聖徳太子（敏達天皇三年（五七四）〜推古天皇三〇年（六二二））は仏法興隆の詔を発するなど、当時まだ一部でしか信仰されていなかった仏教を政治の基調としました。大倉邦彦は、次のように語っています。

聖徳太子が日本の仏教の創設者ともいいますが、一三〇〇年前の時代の仏教を先ず、日本の思想に入れたわけです。（研究所案内（大倉邦彦））

太子は高句麗の僧・恵慈から仏教を学び、注釈書『法華義疏』『勝鬘經義疏』『維摩經義疏』（三經義疏）を著したと言われています。中には、従来の注釈を批判して独自の見解を示している箇所も見られます。

《展示資料》

・大倉邦彦書「以和為貴」【図5】

沿革史資料№11126

憲法十七条の第一条冒頭のことは。
「和を以て貴しと為す」。

【図5】

(2) 天台宗の開祖・最澄

最澄（神護景雲元年（七六七）弘
仁一三年（八二二）は一二歳で出家し、
桓武天皇より入唐求法の還学生に選ば
れ、延暦二三年（八〇四）遣唐使船で
入唐しました。中国での修行を通じて、

「すべての人が仏に成れる」という法華經の教えに基づき、大陸の天台宗に禅・密教を総合した、日本独自の天台教学を確立し、のちに比叡山に延暦寺を開きました。その後、多くの僧侶たちがここで学び、様々な仏教諸派が誕生しました。大倉邦彦は、次のように語っています（「研究所案内（大倉邦彦）」）。



《展示資料》

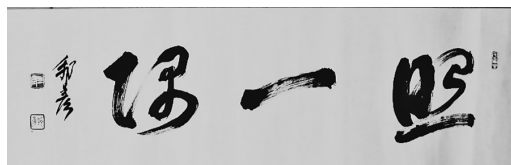
伝教大師（最澄）は聖德太子の、自分が伝統を継いでいくんだと、聖德太子の言われたことを私は実行するように生まれたつもりだというような思想で、京都の比叡山に根本中堂を建てて、そして仏教を広めていかれた。

・大倉邦彦書「照一隅」【図6】

沿革史資料№11116

最澄の著書『山家学生式』の一節。
「一隅を照す、此れ則ち国宝なり。
【社会の一隅に居ながら社会を照らす、その人こそが国の宝である。】。大倉は、昭和四五年（一九七〇）に日本能率協会の中に作られた組織を、この一節から「一隅会」と命名しました。

【図6】



(3) 真言宗の開祖・空海

空海（宝亀五年（七七四）～承和二年（八三五））は、延暦二三年に入唐して、清竜寺の恵果に密教を学びます。帰国後、高野山に金剛峰寺を開き、嵯峨天皇から京都の教王護国寺（東寺）を下賜されました。また綜芸種智院を開いて庶民教育に尽力し、諸国を行脚して社会事業を行いました。死後、弘法大師の諡号が贈られています。大日如来を本尊とする真言宗では、手に印契を結んだり、真言（マントラ）を唱えたりなど、様々な行を通じて悟りをひらいて、現実世界のこの身のままで仏になれる（即身成仏）、と説かれています。

《展示資料》

・空海筆「金剛般若経（開題残巻）」奈良国立博物館所蔵

出典：ジャパンサーチ「Colbase (<https://jpssearch.go.jp/item/cobas-1987>)

空海は、詩文や書道にも才能を発揮し、嵯峨天皇や橘逸勢とともに三筆と称されています。

(4) 日本臨済宗の開祖・栄西

栄西（永治元年（一一四二）～建保三年（一二二五））は、比叡山で天台教学と密教を学び、その後宋へ二度渡ります。二回目の入宋の時、虚庵懷皲に師事して臨済宗黄龍派の禪を修行しました。帰国後、福岡の聖福寺や京都の建仁寺、鎌倉の寿福寺などを開創して臨済禪を展せました。また、中国から茶種を持ち帰り栽培し、喫茶の普及と奨励に努めたことでも知られています。

栄西というのは禪宗の先祖です。禪宗を始めたと言うていい。日本に禪宗として。で、この人はただ支那の禪宗を学んできたというのではなくて、日本へ来ますと『興禅護国論』というものを書いている。

『興禅護国論』という、禪を学ぶということは国を完全に活かしていくという、国と宗教というものが、一つになっています。（研究所案内（大倉邦彦））

臨済宗では、坐禅に打ちこみ、師から示される公案（設問）を解くため必死に努力するなかから悟りがひけると説かれます。こうした自力と克己を尊ぶ栄西の教

えは、武士の気性に適合して支持を集めました。

《展示資料》

・大倉邦彦書「随處作主」【図7】

沿革史資料No.11119

臨済宗の開祖・義玄の言葉。「随處

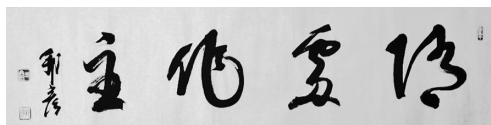
に主と作れば、立處皆な真なり」。

いつでもどこでも主体者となれば、

真実の道に通じる、という意味です。

大倉の座右の銘の一つで、揮毫した

書が多く残っています。



【図7】

『正法眼蔵』などを著し、京都の興聖寺、福井の永平寺などを開創しました。

名誉や利益を求める心（名利の念）こそが修行の妨げであるとして、ひたすら坐禅に徹すること（只管打坐）

により悟りをひらくよう説きました。厳しい規律のもとで坐禅修行を続け、多くの弟子の養成に努めました。道元の教えは、主に地方の土豪や農民に広まりました。

《展示資料》

・大倉邦彦書「以絆為道心」【図8】

沿革史資料No.11311

道元著『典座教訓』の一節。典座とは禅宗寺院で食

事を司る役職。全文は「典座は絆を以て道心と為す」

（典座は絆がけで奉仕することで悟りを得ようとする

心とするのである）。日常生活そのものが、仏性を活

性化させる修行であるという意味です。なお、「三空」

は大倉の号です。

（5）日本曹洞宗の開祖・道元

道元（正治二年（一一〇〇）～建長五年（一二五三）

は、公家の久我家に生まれ、母親の死を機に出家、はじめ比叡山で天台教学を学び、のちに荣西の弟子・明全に

師事し、ともに宋へ渡りました。天童寺の如浄の許で坐

禅修行に励み、曹洞宗の教えを受けました。帰国後は

禅修行に励み、曹洞宗の教えを受けました。帰国後は



【図8】

(6) 浄土宗の開祖・法然

法然(長承二年(一一三三)～建暦二年(一二一二))

は、九歳の時に父親が非業の死をとげ、これを機に仏道に入り比叡山延暦寺で天台教学を学びました。その後、中国の僧善導の『観無量寿経疏』を通じて、それまでの浄土信仰を発展させました。ひたすらに南無阿弥陀仏と称えることで(専修念仏)、誰でも必ず往生できる(称名往生)と説き、その普及に努めました。この教えは貴賤を問わず、多くの人がびとに受け入れられました。しかし既存の他宗派から圧迫を受けて讃岐に流され、四年後に入京を許されましたが、ほどなく亡くなりました。

(7) 浄土真宗の開祖・親鸞

親鸞(承安三年(一一七三)～弘長二年(一二六二))

は、出家し比叡山延暦寺で約二〇年間修行に励みましたが、行き詰まり下山します。そして夢に現れた聖徳太子のお告げによって法然と出会い、専修念仏の教えを学び

ました。法然が流罪に処された際には越後(現新潟県)に流され、赦された後も三〇年近く東日本にとどまって布教に努めました。

親鸞は、法然の教えを継承発展させ、すべての人を救うことは仏が約束していることだから(弥陀の本願)、自己の罪業の深く知る人こそが救いの対象である(悪人正機)、と説きました。また、往生するには何の条件もいらないとして、戒律で禁じられていた肉食妻帯を実行しました。

浄土宗の系統は、これが法然上人で、やっぱり比叡山に学んだ。そして法然上人が、日本では浄土宗の系統、真宗の系統で、浄土宗は真宗と同じ系統としてあるんです。で、浄土宗の系統として親鸞上人、そうするとこれが浄土系統となるのです。(研究所案内(大倉邦彦))

(8) 法華宗(日蓮宗)の開祖・日蓮

日蓮(貞応元年(一二二二)～弘安五年(一二二八))

は、安房（現千葉県）の漁村に生まれ、はじめ天台宗を学び、ついで鎌倉や比叡山などへ赴き諸宗派の教学を学びました。そしてあらゆる經典の中で、『妙法蓮華經（法華經）』こそが仏陀の真意を伝える經典であると確信して開宗を宣言し、専ら「南無妙法蓮華經」の題目を唱えなければならぬ（唱題）、と説きました。

辻説法を行い、『立正安国論』を著すなどして布教に努め、その教えは関東や北国の武士・商人らに広まりました。しかし他宗派と鎌倉幕府を厳しく批判したため、佐渡へ流されました。赦免後は身延山久遠寺や池上本門寺などを開きました。

（9）神道・北畠親房

北畠親房（正応六年（一二九三）～正平九年／文和三年（一三五四））は、鎌倉時代後期から南北朝時代の公卿かつ武士です。後醍醐天皇が吉野に行宮をおくと、常陸（現茨城県）小田城を拠点に南朝勢力の維持に努めました。正平一統（足利尊氏が降伏し南北朝合一が成立、

しかし四ヶ月で破綻）の際には、准后に叙せられています。

北畠は、北朝との戦いの合間に『神皇正統記』を執筆し、神代より後村上天皇までのわが国の歴史を、天皇を中心に簡潔にまとめています。これにより、歴史を通じて皇位が正しい道理に基づいて継承されてきたことを説き、南朝の正統性を主張しました。同書は史論書として重要な位置を占め、後世に大きな影響をあたえました。

（10）儒教・菅原道真

菅原家は代々学問を以って朝廷に仕えており、菅原道真（承和二年（八四五）～延喜三年（九〇三））も文章博士となり宇多天皇の信任を得ました。寛平六年（八九四）に遣唐大使に任命されましたが、道真の建議で中止となっています。醍醐天皇の時代には右大臣に任ぜられましたが、左大臣藤原時平の讒言で太宰府に左遷され、その地で亡くなりました。

死後、都で異変が相次いだことから怨霊として祀られ

ましたが、道真が『菅家文章』^{かんけふんそう}などの詩文集を遺すなど、漢文や漢詩によく通じていたことから、のちに学問・書道の神とする信仰（天神信仰）へと変わっていききました。また「未だ曾^{かつ}て邪は正に勝たず」（『菅家後集』^{かんけこうしゅう}）などに見られるように、道真は「誠」を象徴する人物としても語り継がれています。

支那の学問をしながら、菅原道真は考えたんです。

（中略）日本では（中略）自分の物欲や勢力欲で政治をしてゆくというのではなくて、勝ち負けの問題でなく、徳を持つて治めてゆく。徳とは何かというと、天地宇宙の真理、そういう事を考えたのです。

（『研究所案内（大倉邦彦）』）

《展示資料》

・井村方外画「菅公図」〔図9〕

沿革史資料 №12360

大宰府に流された菅原道真が、一年前の菊の宴で醍醐天皇から下賜された衣を見て、涙を流す場面です。これは道真の次の漢詩に取材しています。

去にし年の今夜清涼に待りき 秋の思ひの詩篇独り

腸を断つ 恩賜の御衣は今此に在り 捧げ持ちて日毎に余香を拝す



【図9】

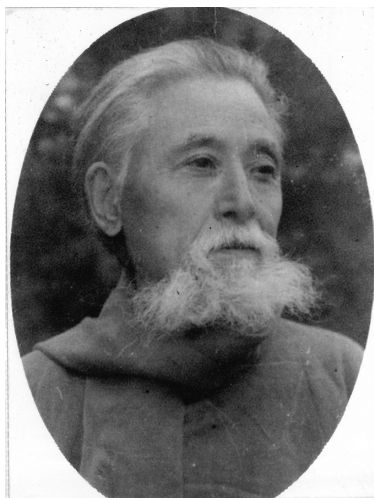
三 宗教画家・井村方外

① 井村方外と妻くにの経歴

日本精神文化曼荼羅を描いた井村方外^{いむらうがい}は、明治十二年（一八七九）、現在の三重県伊勢市船江に生まれました。本名は忠吉。四条派の流れを汲む日本画家で、宗教画を多く製作しました。しかし終戦間近の昭和二〇年（一九四五）の東京大空襲で、ほとんどの作品が焼失しており、現存する作品は極めて希少です。

禅や古武道にも造詣深く、「剣禅画一致」を提唱し、東京の目白上屋敷^{めじろがやしき}（現西池袋二丁目付近）に「念佛道場」を開いています。ここで作品を作るとともに、柔道・剣法・居合術・詩吟・剣舞などの修行に励みました。また、附近の青少年の指導にも当たっていたそうです。昭和二年（一九四六）二月二四日、東京都府中にて亡くなりました。享年六七。

一方、私生活では明治四〇年（一九〇七）頃、静岡県



【図10】 井村方外
（沿革史資料No.8213-02）

出身の野尻くにと結婚し、三人の子供をもうけています。彼女も日本画家の荒木寛畝^{あらかみかんぼ}・十畝^{じゅぼ}に師事し、「一芳」の号を持っていました。

くには明治三七年（一九〇四）三月、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）技藝科を卒業し、附属幼稚園の保母、附属高等女学校の教員、東京市視学などを務め、女子教育の発展に尽力しました。しかし昭和二年（一九二七）九月一五日、四六歳で病死します。

葬式や墓地などの供養は一切不要と遺言しており、井

村家には方外がくのにの供養のために彫った仏像が、いまも安置されています。

② 井村方外の画系

方外は、三人の画家に教えを乞い影響を受けています。

① 磯部 百鱗いそべ ひゃくりん

方外が最初に師事した日本画家です。天保七年（一八三六）伊勢神宮おんしの御師おんしの家に生れ、神宮に奉仕する傍ら、四条派の流麗な画風を学びました。様々な展覧会に出品し、たびたび入賞しています。明治三九年（一九〇六）四月に亡くなりました。

門人たちは「花水社」を結び、大正四年（一九一五）、伊勢市の牛谷坂に顕彰碑「花水翁之碑」を建立しました。方外も建設者の一人として、碑に名が刻まれています。

② 山元 春舉やまもと しゅんきよ

春舉（明治四年（一八七二）～昭和八年（一九三三））

は、円山四条派の画風に西洋画法を取り入れるなど、独自の画風を確立し、竹内栖鳳たけうち せいほうとともに京都画壇の重鎮として活躍しました。

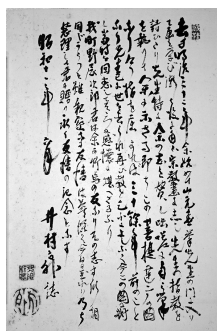
方外は明治三二年（一八九九）九月、春舉が主宰する画塾「早苗会」に入塾しました。

《展示資料》

・山元春舉画「宗達磨画稿」【図11】

沿革史資料 No.1262

春舉が描いた「菩提達磨の図」で、鷲尾順敬の題字と方外が記した由来書とともに、卷子に仕立てられています。方外は入門後のある日、春舉に「宗教画」を志すことを告げ、教えを乞います。すると春舉は賛成して「咄嗟に自ら筆を執り」お手本を書いて方外に与えました。それが、この画稿です。



【図11】 上が、山元春舉が描いた「菩提達磨の図」。左が、昭和11年6月に井村方外が書いた由來書。前半部分に下記のように記されています。

去る明治三十二年余始めて山元春舉先生の門に入りて画を学び、漸く後に自ら宗教画に志し先生の指教を請ひたり。先生特に余の志を賛し咄嗟に自ら筆を執りて余に示さる。即ちこの菩提達磨の図なり。今指を屈すれば三十余年前のとなり。先生已に世を去られ再び教を乞ふによしなく、今この図に対し當時を回想してこゝろに感懷に堪へざるなり。(後略)

(3) 寺崎廣業

（てらさきこうぎょう）

廣業（慶応二年（一八六六）～大正八年（一九一九））は四条派や南画などの技法を研究し、折衷的な画風を確立した日本画家です。岡倉天心に才能を認められ、明治三十一年（一八九八）の日本美術院の創立にも参画しています。

方外は明治四二年頃に東京へ出て、廣業に師事したようです。

③ 井村方外と大倉邦彦

大倉邦彦がなぜ井村方外に描画を依頼するに至ったのか。その謎を解く一次資料は、残念ながら見当たりません。しかし二人をつなぐ鍵として、仏教を介した人脈が考えられます。

一人は、仏教史学者の鷺尾順敬（わしおじゅんけい）（慶応四年（一八六八）

～昭和一六年（一九四一））です。曹洞宗大学・東洋大学などの講師を務めたほか、東京帝大史料編纂官として、『大日本史料』の仏教史料の整理や編纂を担当しました。

鷺尾は日本の仏教を北方仏教の一部とする通説に対して、独自に発展を遂げた「東方仏教」として位置づけるべきであると提唱し、大正一五年（一九二四）五月に東方仏教協会を立ち上げています。方外は発足時から参画し、協会役員（委員）の一人となっています。また、鷺尾が方外の妻と息子の追悼法要の講話を務めるなど、私的にも深く交流していました。

一方、大倉も鷺尾とつながりがあり、彼の弟子の一人である秋山大（秋山真之の長男）は、当研究所の研究員を勤めています。

もう一人は、福井県の発心寺などの住職を務めた、曹洞宗の僧・原田祖岳（はらだそがく）（明治三年（一八七二）～昭和三十六年（一九六二））です。大倉は祖岳の指導の下で坐禅の修行に勤め、祖岳を講師として招いて、毎月、自宅で宗教講話会を開催しました。

一方、祖岳は「国家社会及び人生の善化向上」を目的に、有志らと雑誌『大乘禅』を刊行しています。この雑誌には、方外の挿絵が多数掲載されています。

《展示資料》

・井村方外画「一休禪師」

井村家所蔵

杖の先にドクロを着けて歩く一休禪師。一休禪師が正月に「門松は冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」と歌いながら練り歩いたという逸話を取材した作品で、方外は好んで描いています。この書幅の賛は鷺尾順敬筆。

・写真「大倉邦彦と原田祖岳ら」

沿革史資料No.2222

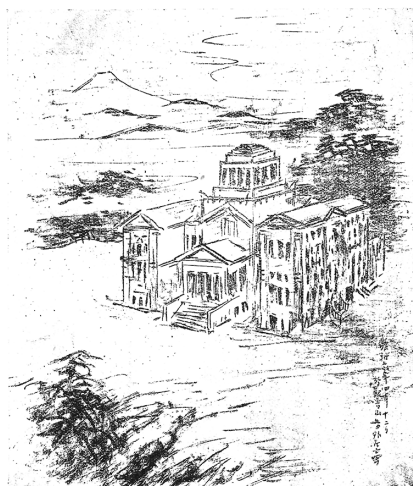
大倉精神文化研究所本館（現横浜市大倉山記念館）の正面入口前の階段に、大倉邦彦と原田祖岳らが並んで立って写っています。

・井村方外画「大倉精神文化研究所本館」〔図12〕

沿革史資料No.2253-9

中央仏教社から刊行された雑誌『大乘禅』八（五）（昭和六年五月）に掲載された井村方外「大倉精神文化研究所を観る」の挿絵です。

右下に「昭和六年四月十二日於観音山方外居士写」と記されています。この日は上棟式及び施設見学会が



【図12】

開かれており、方外を含む約三五〇名が参加しましたと記録されています。この絵には富士山が描かれていますが、当日は「曇天ニテ薄寒ク遠景ノ眺望」はよくなかったようです。外観が完成した建物とはいくつか相違があることから、方外は完成予定の模型を見た上で、この俯瞰図を描いたと推測されます。

④ 井村方外の作品——初期——

方外の最初の出品作品として現在確認できるのは、明治三四年（一九〇二）一〇月の第一回日本美術院連合絵画共進会の「野狐」で、一等褒状を受けています。

その後も各種展覧会に出品していますが、ここでは日本最初の公設展・文部省美術展覧会（文展）への出品作品を紹介します。

《展示資料》

・井村方外画「俊寛」〔井村方外遺作画帳〕（『沿革史資料No.1085』より明治四〇年（一九〇七）に開かれた第一回文部省美術展覧会の入選作品。枯木の杖を持つて海を眺めている、平安時代後期の僧侶・俊寛しゅんかんが描かれています。

俊寛は平清盛の専横を惡み、有志らと転覆を企てますが、密告により計画は露見し、藤原成経・平康頼とともに薩摩国の鬼界ヶ島きかいがしまに流されました。その後、成経と康頼は赦され京に戻ることができましたが、俊寛だけは赦されず島にとり残され、現地で亡くなりました。

非業の死を遂げた俊寛は、その後歌舞伎や能の題材となり、語り継がれてきました。

・井村方外画「小矢児」

『文部省美術展覧会図録 第6回 日本画之部』

明治四五年（一九一二）の第六回文部省美術展覧会における入選作品です。弓矢を持つている九歳の法然の姿を画いています。

ある日、押領使であつた父・漆間時国が、土地問題でもめた明石源内定明から夜襲を受けます。幼かつた法然も小さな弓矢をとって応戦したところ、射た矢が定明の目の辺りに命中しました。このことから、法然は「小矢児」と呼ばれるようになります。しかしその後、父・時国はこの夜襲で負った傷が原因で亡くなります。時国は法然に仇討ちをきつく戒め、「はやく俗をのがれ家を出て我菩提をとぶらひ、みずからの解脱を求めん」と遺言を残しました。これを機に、法然は仏道の世界へと進むことになります。

・井村方外画「蓮の糸」【図13】

雨沼山西光寺所蔵

大正六年（一九一七）の第一回文部省美術展覧会の入選作品です。中将姫が菩薩の助けを得て、一丈五尺四方の曼荼羅を織り上げる様子を描いています。

中将姫は藤原豊成の娘で、父の再婚相手に妬まれ、次第に命さえ狙われるようになったため、一六歳で奈良県の當麻寺に入り尼となりました。ある日、彼女は一人の老尼から「蓮の茎を集めよ」と告げられます。さつそく蓮の茎を集め、そこから採った糸を洗うと自然に五色に染まりました。そして、新たに現れたもう一人の若い女性と、中将姫は一緒にお堂に籠もり、一



【図13】

晩で曼茶羅を織り上げました。これが、現在、同寺が所蔵する国宝「綴織當麻曼茶羅」と伝えられています。

この作品の現物は、神奈川県秦野市の西光寺の本堂に掲げられています。住職によると、昭和五〇年代半ばに、ある檀家から寄進されたそうです。鶴巻北周辺にはかつて「落幡村」がありました。『新編相模風土記稿』によると、中将姫が織り上げた、大きくて立派な幡曼茶羅が飛んできて、善波太郎という人物が射落としたことに由来するそうです。この作品が、中将姫にまつわる伝説が残る同地にある西光寺の所蔵となったのも、不思議な縁と言えるでしょう。

⑤ 井村方外の作品 研究所所蔵

方外は「宗教画家として生涯を捧げて居る」宗教芸術、殊に我国の祖先が心血を注いでくれた超越的な精神的な偉大なる仏教芸術を研究し、其の尊い精神を少しでも表現したい」と語っています。

特に仏教にまつわる絵を数多く描いており、当研究所

が所蔵する作品の多くが、仏教の教えを題材としています。

《展示資料》

・井村方外面「降魔之図」

沿革史資料 No.12326

題材は「降魔成道」です。釈迦が菩提樹の下で、両足を組み合わせて両腿の上に乗せて座って瞑想に入ったところ、魔羅はこれを妨げようとやってきます。しかし釈尊はそうした妨害（煩惱）をすべて退け、ついに悟りを開きました。その瞬間を描いています。

・井村方外面「観音大士図」

沿革史資料 No.12321

・井村方外面「観音像」

沿革史資料 No.12327

観音菩薩（観世音菩薩）は、人びとの救いを求める声を聞き、それに応じて身を三十三通りの姿にかえて救済するとされています。

・井村方外面「達磨」

沿革史資料 No.12328

達磨は六世紀の僧で、禪宗の初祖と位置づけられています。インドから中国に渡り、少林寺で壁に向かって九年間坐禅を組み、悟りをひらきました。賛は、清水寺の貫主などを務めた大西良慶の筆。（本来無一物、

亦た塵の払う可き無し、若し能く此に了達すれば、用
いず坐して兀兀たるを。

・井村方外画「恵美須ノ図」

沿革史資料No.1295

えびすは七福神の一員で、漁業や商売の神。通常、風
折り烏帽子に狩衣、指貫を着け、釣りざおで鯛を釣り
あげている姿で描かれます。

・井村方外画「おひな様」

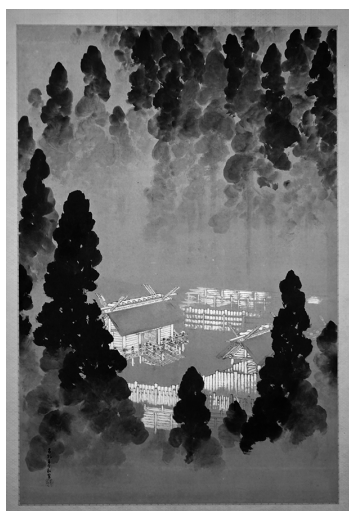
沿革史資料No.1297

題材は「紀伊国加太神社御守雛」です。和歌山県和歌
山市にある淡嶋神社のこと、毎年三月三日にお雛様
を木の船に乗せて供養する「雛流し」が行われています。

・井村方外画「伊勢神宮（内宮）」

沿革史資料No.1298

社殿の屋根の上にある千木の先端が、地面に対して水
平に削られる内削ぎであることから、天照大御神を祀
る伊勢神宮の内宮と考えられます。この絵もかつては
応接室（現第5集会室）に掲げられていましたが、
現在は附属図書館の書庫に保管されています。



【図14】

・井村方外画「旭松」

沿革史資料No.1299

海辺近くの松の向うに朝日が昇っている情景を描いて
います。中央には、太陽の光に照らされて紅色に染
まった富士山も、うつすらと見えます。下の落款に
「元旦試筆」とあることから、新しい年を迎えて最初
に描いた作品と思われます。

・井村方外画「震災画」

沿革史資料No.1300

大正一二年（一九二三）九月一日の正午近く、南関東
を中心に巨大地震が発生し、建物倒壊や強風を伴った

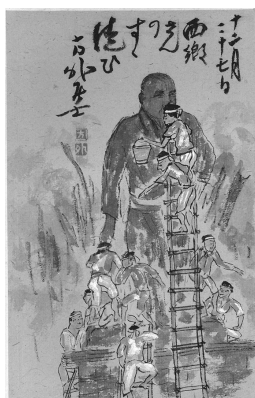
火災などによって、約一四万人もの死者・行方不明者が生じました。方外も東京で被災しましたが無事でした。その後、都内各地を回って、災害風景を写生しています。翌年四月、方外は東京丸の内で第三回宗教画展を開催し、「地震所見」巻物一五点と小品七点を出品しています。この作品はその一つと推定されます。

なお『井村方外遺作画帳』に巻物の下図が掲載されています。説明文には、巻物は一〇mにも及ぶ大作で、完成後は藤田四郎を介して、震災記念堂（現 東京都慰霊堂・東京都墨田区横網）に奉納されたとあります。しかし、巻物の現物はまだ確認できていません。

・「大正十四年 井村方外絵日誌」【図15】

沿革史資料 No.2357

方外はその日の出来事などを描いた絵日誌を作成していました。当研究所が所蔵するのは、大正一四年（一九二五）一月一日から一二月三十一日までの一年分です。四冊の折本からなっており、箱蓋の裏には「大正西寅春日 画日誌 方外自題」と墨筆で記されています。各面に色付きの絵が描かれており、例えば「昨夜両国川



【図15】



開七月二十六日【図15】中、「西郷さんのすす洗ひ十二月二十七日」【図15】左）など、年中行事や人びとの日常生活も題材としています。

⑥ 井村方外と徒歩会

雑誌『大乘禅』『中央仏教』に掲載された方外による挿絵は、仏教関係の宗教画だけでなく、風景画も数多くあります。方外が書いた文章や「絵日誌」から、これらの多くは「徒歩会」に参加した時に描かれたことが確認できます。

徒歩会とは大正一二年（一九二三）に「修養的徒歩」を目的に結成された団体で、会員は実業家や学者、芸術家、医師など、幅広い分野から集まっていました（次頁【表1】）。

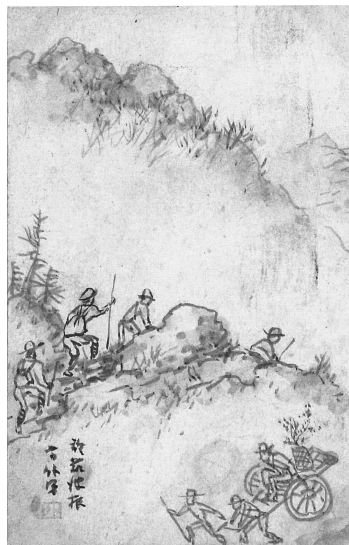
《展示資料》

・金井紫雲宛井村方外葉書【図16】

沿革史資料No.12777

宛先の金井は、大正・昭和初期に活躍した美術記者です。昭和一三年（一九三八）四月、徒歩会で筑波山に

登山した際の様子を描いています。



【図16】

【表1】 徒歩会の主要メンバー（井村方外「徒歩会紀行」（『美之國』2-6）などのコラムや新聞記事から作成）

氏名	生没年		氏名	生没年	
あまのくろ 朝倉 文三	1863－1935	医師（日本泌尿器病学会初代会長）	くらはし 倉橋 惣三	1882－1955	教育者／東京女子高等師範学校教授
いけだ 池田 敬八	1874－1963	大蔵官僚	さよくさだいざぶろう 三枝代三郎	1867－??	実業家（伊勢興（現ギンザのサエグサ）2代目社長）
いしはら 石原 健三	1864－1936	内務・宮内官僚	しのはら み ちろう 篠原三郎	1886－??	実業家（東京急行電鉄社長など）
いとう 伊藤多兵衛	?	実業家（品川白煉瓦株式会社社長など）	せきね 関根 要八	??～??	青山学院第7代理事長
いぬい 乾 政彦	1876－1951	法学者／弁護士	たけち 武智 直道	1870－1963	実業家（台湾製糖株式会社など）
いわた 岩田 宙造	1875－1966	弁護士／政治家	たなか 田中 次郎	1873－1931	通信官僚／実業家
よぐち 江口 定条	1865－1946	実業家（南満洲鉄道株式会社副総裁）	だんの 檀野 礼助	1875－1940	実業家（南洋貿易株式会社・東京海運株式会社取締役など）
えんどう 遠藤 藤吉	1868－1953	鉄道院技師／南満洲鉄道株式会社参事	どい 土肥 脩策	1868－19??	実業家（東京帽子株式会社（現オーベクス）専務取締役など）
おおしままさ 大島雅太郎	1868－1948	実業家（三井財閥幹部）	はやくわ 早川 徳次	1881－1942	実業家（東京地下鉄道株式会社など）
おおはし 大橋 光吉	1875－1946	実業家（共同印刷株式会社など）	はやし 林 あいさく 愛作	1873－1951	実業家（帝国ホテル支配人／甲子園ホテル支配人など）
おおやまう 大山卯次郎	??－1939	外交官（サンフランシスコ総領事など）	ひかげ 日影 たかす 董	??～??	医師
おざわしん 小澤信之甫	1878－??	実業家（株雨宮製作所・大日本軌道株式会社取締役など）	ふたき 二木 けんぞう 謙三	1873－1966	医師（日本伝染病学会初代会長）
かとう 加藤 正治	1871－1952	法学者／中央大学総長	はらうちみ 堀内 明三郎	1872－??	実業家（大日本人造肥料株式会社（現日産化学）専務取締役など）
きたむら 北村 西望	1884－1987	彫刻家／文化勲章	むらい 村井 ころう 五郎	1884－??	実業家（村井銀行幹部）
きどきこう 城戸崎廣三	1876－??	実業家	もうい 諸井 ろくろ 六郎	1872－1940	外交官（アルゼンチン特命全権公使など）
きのした 木下 益雄	1888－??	医師（熊本医科大学教授など）	やまぐち 山口喜三郎	1874－1947	実業家（東京芝浦電気株式会社（現東芝）初代社長など）
くにざわしん 国沢新兵衛	1864－1953	実業家（南満鉄鉄道株式会社理事など）			

《主な参考文献》

- ・ 帝国絵画協会編輯所編『帝国絵画名鑑 現代之部』（帝国絵画協会、大正元年）
- ・ 雑誌『大乘禪』一（三）～一六（七）（中央仏教社、大正一三年～昭和一三年）
- ・ 雑誌『中央佛教』一〇（二〇）～一七八（九）（中央仏教社、大正一五年～昭和八年）
- ・ 井村次彦他『井村方外遺作画帳』（井村次彦、昭和五四年）
- ・ 東方仏教協会『東方仏教』（名著普及会、昭和六三年「復刻版」）
- ・ 平岡昭啓「近代日本画の師弟山元春挙と画塾「早苗会」の門人たち」（奈良県立美術館紀要）四、奈良県立美術館、昭和六三年）
- ・ 神宮徴古館「磯部百麟・伊勢の画人…没後百年記念展」（神宮徴古館、平成一八年）